

令和元年6月28日現在

機関番号：32808

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07203

研究課題名（和文）4歳児積み木場面における協働過程の検討

研究課題名（英文）Study for the collaborative process in 4-year-old children's block play

研究代表者

宮田 まり子 (Mariko, Miyata)

白梅学園大学・子ども学部・講師（移行）

研究者番号：50350343

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、積み木と協働性の育ちとの関係を検討することである。方法は、4歳児積み木場面への参与観察であり、積み木の操作と発話に着目して分析を行った。結果、4歳児積み木場面では、積み木の道具的利用によるイメージの可視化と、それによる共有化が観察された。また積み木で場が仕切られた空間が作られることにより自ずとメンバーが形成されていることが確認された。また、保育者の介入がない時でも、積み木の操作と言語による相互行為によって、互いのイメージが整理され、場面が展開される状態は確認されたが、操作する積み木が無くなると、場は継続されるものの、新たな物語の生成はほとんど確認されなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、園内における対人的物的環境要因としての積み木に着目してその変容を明らかにすることによって、適当な幼児教育方法と教材に関する知見を提示することにある。おおよそ4歳児は葛藤と自己調整を繰り返す中で、集団におけるより良い在り方を獲得していくと言われている。社会的望ましさを意識する最初の過程である時期であり、4歳児クラスにおいてその相互行為を観察することは、社会的活動としての原初的な振る舞いを観察することを意味する。研究では、5歳児クラスへの移行の過程で、積み木を操作し、場が生成されることによって明らかになる行為者のイメージが相互行為を促進させることが示されている。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the relationship between the effect of building blocks and the development of collaboration. The study relied on the method of participant observation in the class of 4-year-old, followed by an analysis focused on their maneuvering of blocks and oral expressions. Observed in the scenes of 4-year-old handling the blocks was their attempt to visualize the images of using them as a tool and share the created works through the visualization. Also confirmed was the natural formation of particular member groups as a result of the play space being divided by blocks into specific chambers. Additionally, we confirmed that, even without intervention by a teacher, children sorted out their images among them by manipulating blocks and exchanging verbal interactions, thereby advancing the scenes to the next stage. Although they continued to play at the same space after all building blocks were gone, we could notice little creation of new stories.

研究分野：幼児教育

キーワード：積み木 4歳児 協働 幼稚園 物語生成

様式 C-19, F-19-1, Z-19, CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

持続可能な社会の開発に向けてのこれからの新しい学力観において、創造的に自己を超えて協働していく能力の育成は重要であるとされており、そのためとして、幼児期からの段階的な経験の蓄積と学びによる育ちは重視されている。

我が国における保育のガイドラインである保育所保育指針や幼稚園教育要領の中に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として「協同性」がある。国際的にも、「OECD 教育スキルの未来 2030」プロジェクト等において社会情動的なスキルの獲得とその方法や評価についての検討が行われている。幼児が育つ環境の中に、他者との相互行為を促進する環境刺激の意図の設定は必要不可欠である。

しかし、人間関係や協働が重視される一方で、実際に制度的保育を利用する幼児が、どのように他者と関わり合っているかについては十分に検討されておらず、具体的な指導方法についても十分には明らかにされていない。保育者が保育環境をマネジメントする際に指標となる知見が求められている。

本研究では、保育環境において意図的に設定される物的環境の一つである「積み木」に着目する。理由の一つは、保育において積み木は世界的に広く普及していることにある。宮田(2014)では、3歳児クラスにおける積み木場面において、積み木の特性と積み木場面固有の行為に着目して、探索的に長期的な観察を記録し、それらの結果からより焦点化した観察の記録において分析が行なわれている。結果 3歳児が、特に積み木の「崩れ」を刺激として他児の意図を理解したり、他児への働きかけを促進させたりしていることが示唆されている。しかしこれらの研究では、意図を理解してから幼児のみで協働して展開していくまでは確認されず、3年保育2年目の4歳児で展開されることが仮定される。保育者が積み木場面に参加する場面に着目した検討では、保育者が構築物に対する積み上げイメージの共有に関わる支援をすることが、積み木場面の展開と継続に必要であることが明らかになっている(宮田, 2016)。

以上より、4歳児クラスにおける分析において、積み上げに対する他者の意図を理解した後、協働して展開するためにそこでの互いが期待する役割をどのように取得したり演じたりしているのか、その過程と環境要因を究明する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、保育者によって設定された環境要因が協働性の育ちにどのように関係するかを検討することである。協働場面は他者の意図を理解し、他者が期待する役割を獲得することによって生成する。しかし、協働場面の展開を支える役割取得が保育環境の何によって生成され、促進されているか、またそれらと発達との関係についての知見は少ない。本研究では、保育環境における物的環境として「積み木」を対象とする。積み木に着目した研究では、4歳では遊びの進行によって、積み木に積み手にしか見えない価値が生じ、それが行為に影響を与える可能性が示唆され(山本, 2011)、5歳児では説明や伝達といった発話を促進させる可能性が示されている(Lynn Cohen & Joanna Uhry, 2007)。しかし先行研究では、積み木が相互行為の発生に関与した可能性は示しているが、行為と積み木固有の要因への検討は少なく、積み木のどのような性質や動きが幼児の相互行為の何に関係しているかといった分析はなされていない。

園における3歳児が積み木を介して他児と相互行為を行なう実際の様子から、積み木という教材が3歳児の相互行為に及ぼす影響を検討した研究では、3歳児が、特に積み木の「崩れ」を刺激として、他児の意図を理解するなど他児への働きかけを促進させていることが示唆された(宮田, 2014)が、その後の継続の多くは保育者の支援があった(宮田, 2016)。よって本研究では4歳児積み木場面において、相互行為の事例から、他者の意図を理解し他者の期待する役割を取得し協働して展開するまでの過程と環境要素としての積み木との関係について検討していく。

3. 研究の方法

(1) 研究協力者：都内私立 A 幼稚園、4歳児 28 人

(2) 期間：2018 年 4 月～2019 年 3 月

(3) 方法：参与観察において、中型木製積み木が置かれた 4 歳児保育室において行なう。

(4) 倫理的配慮：研究の遂行にあたっては、学会の倫理規定に則り計画をし、内容は所属先の倫理審査を経ている。保育観察を研究協力施設に依頼する際に、研究依頼書を作成し、協力園施設長の同意を得た。また、全ての情報に仮名を用いる等して個人が特定されることのない情報とすることを口頭で伝え、幼稚園長の同意を得ている。観察中は全ての研究協力者の心身の安全を確保することに努め、心理的負担が生じないよう配慮した。

4. 研究成果

(1) 結果と考察

4歳児積み木場面での観察から、3歳児と異なる幾つの特徴が確認された(Table1)。

4歳児積み木場面では、幼児の操作性に優れ、簡単に場を構成できるという積み木の特性から、積み木の道具的利用によるイメージの可視化と、それによる共有化が促進されることや、共有されるものが特定の物ではなく共有しやすい広さ・大きさを持つ場(積み木で囲われた空間)であることから、参加している者と参加していない者との区別が明確になり、結果途中参加者の存在が発生すること、更に途中参加者による新たな展開の提案を可能にしていることが示された。

一方で、3歳児クラスにおける積み木場面では、保育者の介入なく場面が展開されていくことは確認できなかった。4歳児クラスの積み木場面では、上述のように、積み木を上積みするだけでなく、空間を作るなどして道具の利用における技術が獲得されたことなどを基礎として、保育者の介入なく場面が展開されることは確認された。しかし、保育者の介入のない場面の展開は短期的な終結に至るものがほとんどであり、多くは積み木の状態は保持されつつも、場面における設定自体が変更されていく状態であった。

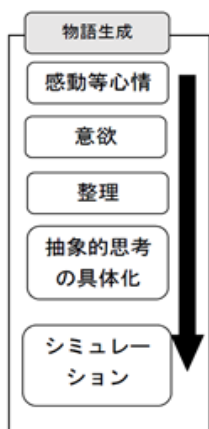


図1:物語生成の過程

小方他(1996)から、場面の展開を支える物語の生成には、図1のような過程が必要となることは仮定される。3歳児積み木場面においては、積み木の積み上げ行為と崩し行為において、目的の相違が明示化していた。そうした、目的の相違をきっかけとして発生する相互行為と、保育者による介入によって、場面は整理されていた。4歳児積み木場面では、保育者の介入がない時でも、積み木の操作と言語による相互行為によって、互いのイメージが整理され、場面が展開される状態は確認されたが、操作する積み木が無くなると、場は継続されるものの、新たな物語の生成はほとんど確認されなかった。

(2)残された課題

4歳児積み木場面において、積み木の材質と行為との関係、更には4歳児～5歳児に向けての発達の特性の特には積み木の道具的使用時において、場の展開との関係が予想される他者との物語生成について検討していくことは今後の課題である。

4歳児の積み木場面は発生しては継続し、展開なく次の日を迎えることが多いが、そうした過程が積み重ねられることが、場面の展開を支える物語の生成を促進させることになるのではないか。よって、今後はより長期的な観察の中での、時間的変化について検討していきたい。

加えて、Table1に示した、3歳児積み木場面と異なる4歳児積み木場面における特徴的な行為に関する結果は、3歳児積み木場面の調査では積み木の素材がコルクやウレタン積み木であったのに対し、4歳児積み木場面の積み木は木製の積み木が設定されていたことの影響も考えられる。4歳児コルク積み木の場面と中型木製積み木場面でのイメージの共有では、共にその内容の展開に柔軟性はみられたが、特に小型で軽量のコルク積み木では積み上げて容易に位置がずれる等、もともと形状が安定しない性質を持つことが、柔軟な展開に向けての行為の要因になった可能性がある。よって、積み木の材質との関係も今後の課題としたい。

Table1:4歳児積み木場面における特徴的な行為とその内容

特徴	内容
役割の発生と目的の共有	伝達された目的に関わる積み木の操作があることが、目的の共有を示すことになっており、場面が継続されていく。
途中参加者の受け入れ	場を見ていた者が「いれて」と言う、あるいは参加時点の行為の一部(積み上げ等)を担うと参加が認められる。途中参加者による行為の失敗(積み木の崩れ等)に対する評価は厳しく、厳密であることが多い可能性がある。
積み木以外の物の持ち込み	積み木の操作可能範囲は積み木の個数と展開可能な場の大きさ(広さ・高さ)に関係し、操作不可となると積み木は道具的利用に至る。その後の、操作者が想像したストーリーに合う物の積み木場面への持ち込みは、継続と展開の支えになっている可能性がある。
場の占有	設定時間の終了以外での積み木場面の終わりは操作終了ではなく、操作者の終了の宣告にある。積み木場面には①操作自体を目的とする場面②場を占有するための道具的利用の場面の2場面がある。

〈引用文献〉

①Lynn Cohen & Joanna Uhry, Young Children's Discourse Strategies During Block Play:A Bakhtinian Approach, *Journal of Research in Childhood Education*, 21(3), 2007, 302-315.
 ②宮田まり子, 3歳児積み木崩れ場面の検討-崩れに伴う応答と行為に着目して-, 保育学研究, 52巻 2号, 2014, 39-52
 ③宮田まり子, 3歳児積み木場面における保育者の関わり-保育者の発話と行為に着目して-, 国際幼児教育研究, 23巻, 2016, 57-68

- ④小方 孝, 堀 浩一, 大須賀 節雄, 物語生成システムのための物語構造の分析と物語生成過程の検討, 認知科学, 3 巻 1 号, 1996, 72-109
- ⑤山本弥栄子, 共同あそびにおける幼児間のイメージ共有と保育の課題—限定数と多数の積み木あそびとの比較検討—, 創発, 大阪健康福祉短期大学紀要 10, 2011, 65-76

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

- ① 宮田 まり子, 4 歳児積み木場面における相互行為に関する検討, 日本保育学会第 71 回大会, 2018
- ② Mariko Miyata, An analysis of 4 year old children' s block play scene : Focusing on the children creation and sharing, 28th European Early Childhood Education Research Association. 2018 (査読有)

〔図書〕(計 1 件)

- ①宮田 まり子, 風間書房, 園における 3 歳児積み木場面の検討, 2019, 139

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号 (8 桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。